

十勝岳の火山活動解説資料

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ＞

十勝岳では、8月中旬から9月中旬にかけて山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震が増加しましたが、その後は減少しており、規模の小さな地震も含めて少なく経過するなど地震活動に低下傾向が認められます。

このことから、62-2 火口から概ね3km の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（16日）10時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

一方、引き続き 62-2 火口付近の熱活動は高い状態にあり、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動や火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態は継続しています。活発な火山活動は維持されているため、62-2 火口から概ね1.5km の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

【防災上の警戒事項】

62-2 火口から概ね1.5km の範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況

・地震及び微動の発生状況（図2-⑤～⑦、図3-⑤～⑦、図4-⑥～⑩、図5）

4月以降、62-2火口付近及びその周辺の地震活動はやや高まって推移しています。

8月中旬から9月中旬にかけて、山体付近（主に62-2火口の周辺）を震源とする振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅2μm以上）が増加し、前30日間の積算回数で5回（噴火警戒レベル3引上げ基準）となるなど地震活動にさらに高まりがみられましたが、その後は減少しています。62-2火口の周辺では、規模の小さなものも含めて地震は少なく経過しており、地震活動に低下傾向が認められます。

一方、62-2火口付近では、9月13日から14日にかけて地震回数が一時的に増加し、10月7日には継続時間が約21分の火山性微動が発生するなど、引き続き、盛衰が認められます。

・噴煙など表面現象の状況（図2-①～③、図3-①～③、図4-①～⑤、図6）

8月7日以降、噴火は観測されていません。

5月以降、監視カメラによる観測で62-2火口及び同火口に隣接する振子沢噴気孔群の噴煙（噴気）がこれまでより高く上がるなど、62-2火口付近の熱活動に高まりがみられています。8月以降、さらに高まる様子は認められませんが、引き続き活発に推移しています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータ及び機動的な調査観測・解析グループ（国立研究開発法人防災科学技術研究所・東京大学）のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-④）

10月7日及び8日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は1日あたりそれぞれ700トン及び900トンでした。4月から7月は1日あたり1,000～2,000トン程度、8月下旬以降は1日あたり1,000トン程度で推移しており、増加傾向は認められませんが3月以前と比べて放出量の多い状態が継続しています。

・地殻変動の状況（図3-⑧、図7～8）

GNSS連続観測では、山体を挟む一部の基線で、3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びが認められています。6月頃からは伸びが鈍化していますが、現在も継続しています。

また、国土地理院によるGNSS連続観測及びその解析によると、「美瑛（国）」－「新得（国）」等の山体を挟む長い基線でも2026年3月末頃からわずかな伸びが見られています。

○活動評価

8月中旬から9月中旬にかけて増加した山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震はその後減少するなど、地震活動には低下傾向が認められます。また、噴火の発生状況やその他の観測データの状況にも火山活動のさらなる活発化を示す変化は認められていません。このため、火口から概ね3kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったとみられます。

一方、引き続き62-2火口付近の熱活動は高い状態にあり、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動や火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態は継続しています。活発な火山活動は維持されているため、62-2火口から概ね1.5kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。



図1 十勝岳 警戒が必要な範囲

・62-2 火口から概ね 1.5km の範囲 (赤円内) では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

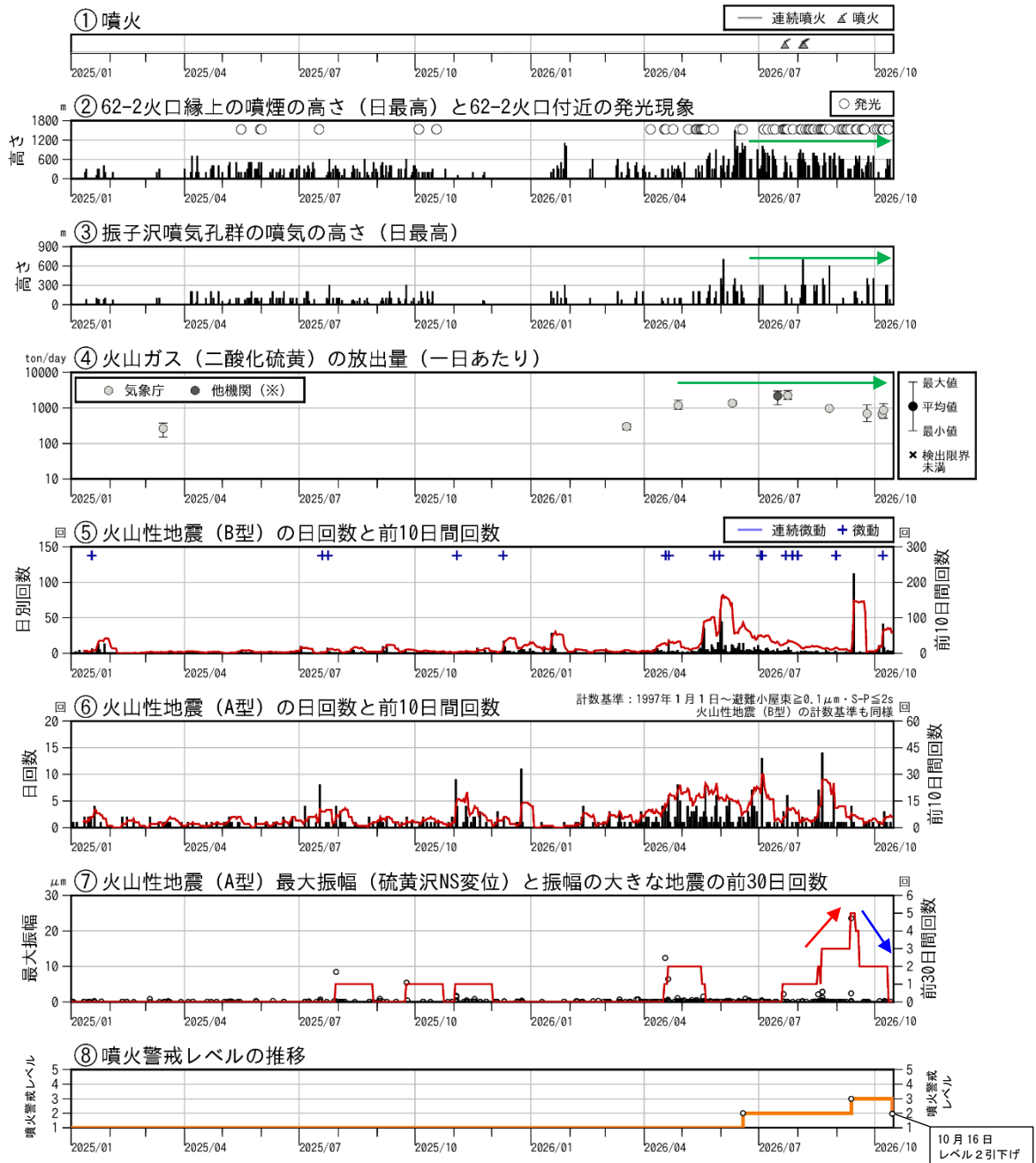


図2 十勝岳 火山活動経過図（2025年1月～2026年10月14日）

- ②の発光を示すプロットは、監視カメラで62-2火口付近（62-2火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含まれます）で発光が観測された日を示します。
- ④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。
- ⑤は主に62-2火口付近のごく浅い所（図5参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、
- ⑥は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの前10日間の積算回数を示します。
- ⑦の赤折れ線は振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅 $2\mu\text{m}$ 以上）の前30日間の積算回数を示します。
- ・8月中旬から9月中旬にかけて、山体付近を震源とする振幅の大きな火山性地震（山麓の硫黄沢観測点で最大振幅 $2\mu\text{m}$ 以上）が増加し、前30日間の積算回数で5回（噴火警戒レベル3引上げ基準）となりましたが（⑦赤矢印）、9月13日以降は発生しておらず、減少しています（⑦青矢印）。62-2火口の周辺では、規模の小さなものも含めて地震は少なく経過しており、地震活動に低下傾向が認められます（⑥）。
 - ・62-2火口や振子沢噴気孔群付近の噴煙・噴気の高さは高い状態が継続しており、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も3月以前と比べて多い状態が継続しています（②～④緑矢印）。

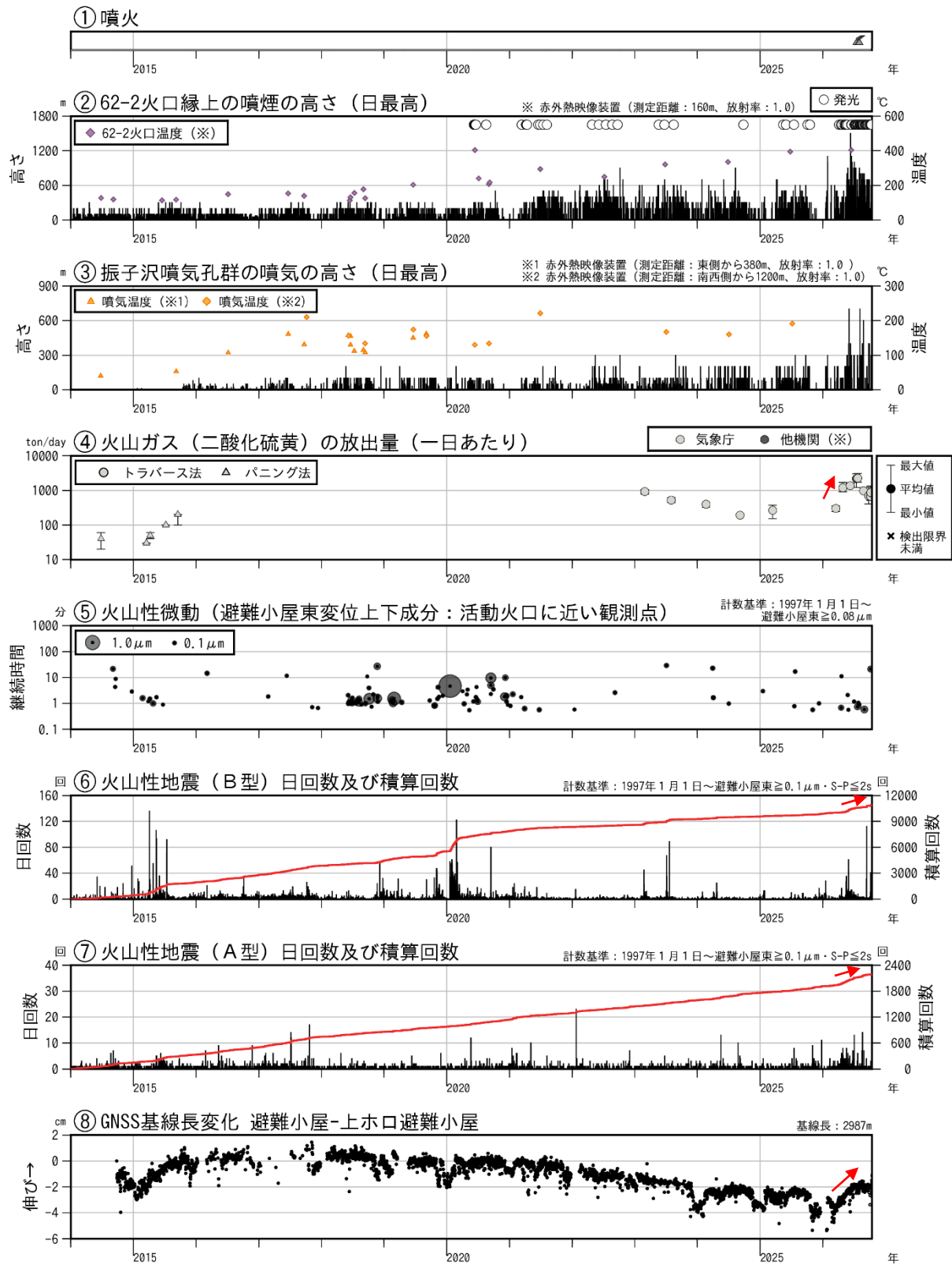


図3 十勝岳 火山活動経過図 (2014年1月～2026年10月14日)

④他機関(※)は機動的な調査観測・解析グループ(防災科学技術研究所・東京大学)及び北海道大学の観測を示します。

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所(図5参照)で発生したと推定されるB型地震の回数、

⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。また、赤折れ線はそれぞれの積算回数を示します。

⑧は観測点配置図(図8)の基線④に対応しています。

- ・3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示すGNSS基線の伸び(⑧)が認められ、4月以降は、火山ガス(二酸化硫黄)放出量の増加(④)、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化(⑥⑦)が認められています(赤矢印)。

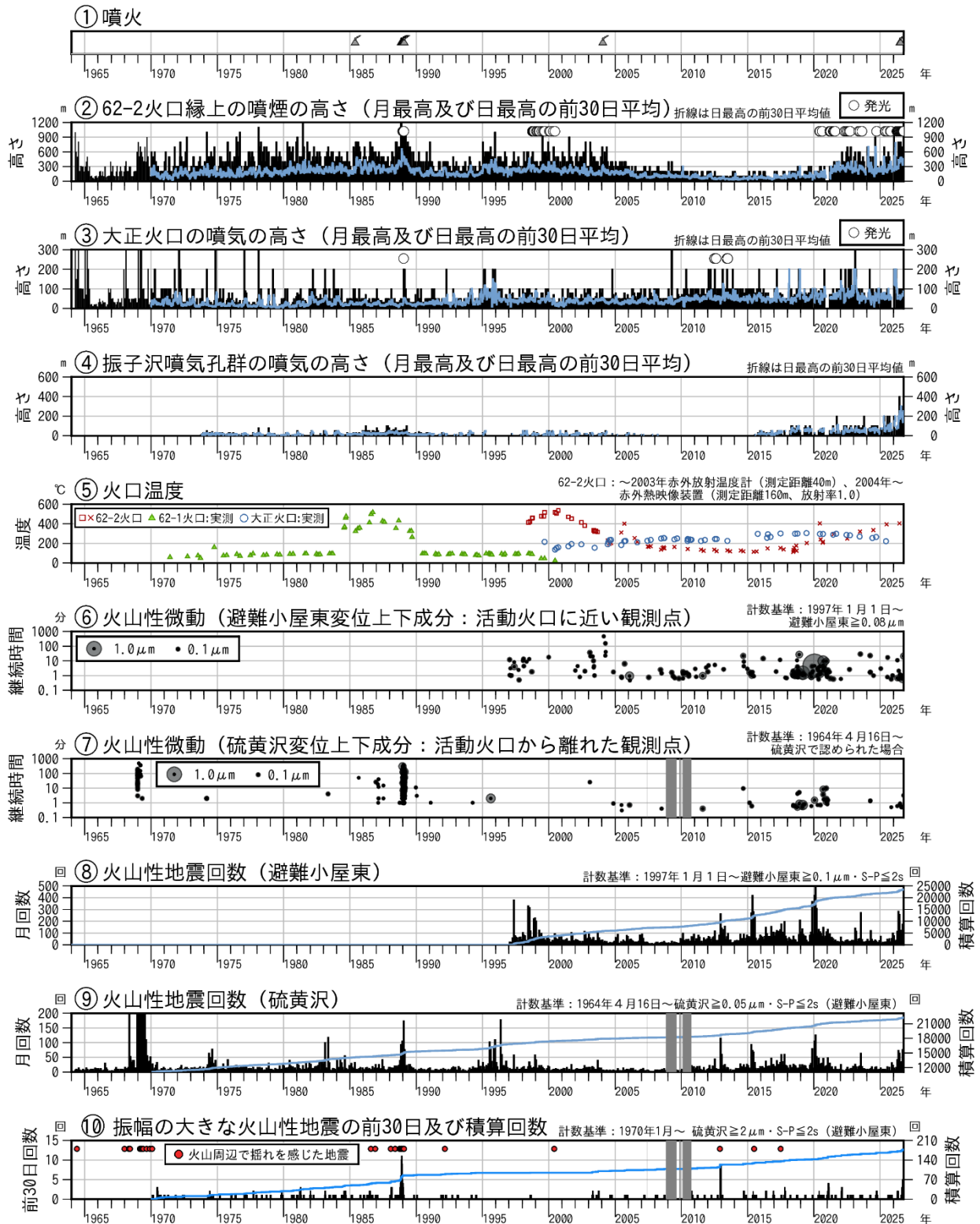


図4 十勝岳 火山活動経過図 (1964年1月~2026年10月14日)

- ②の発光を示すプロットは、目視や監視カメラ等で62-2火口付近 (62-2火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます) で発光が観測された日を示します。
- ⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。
- ⑦⑨⑩の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

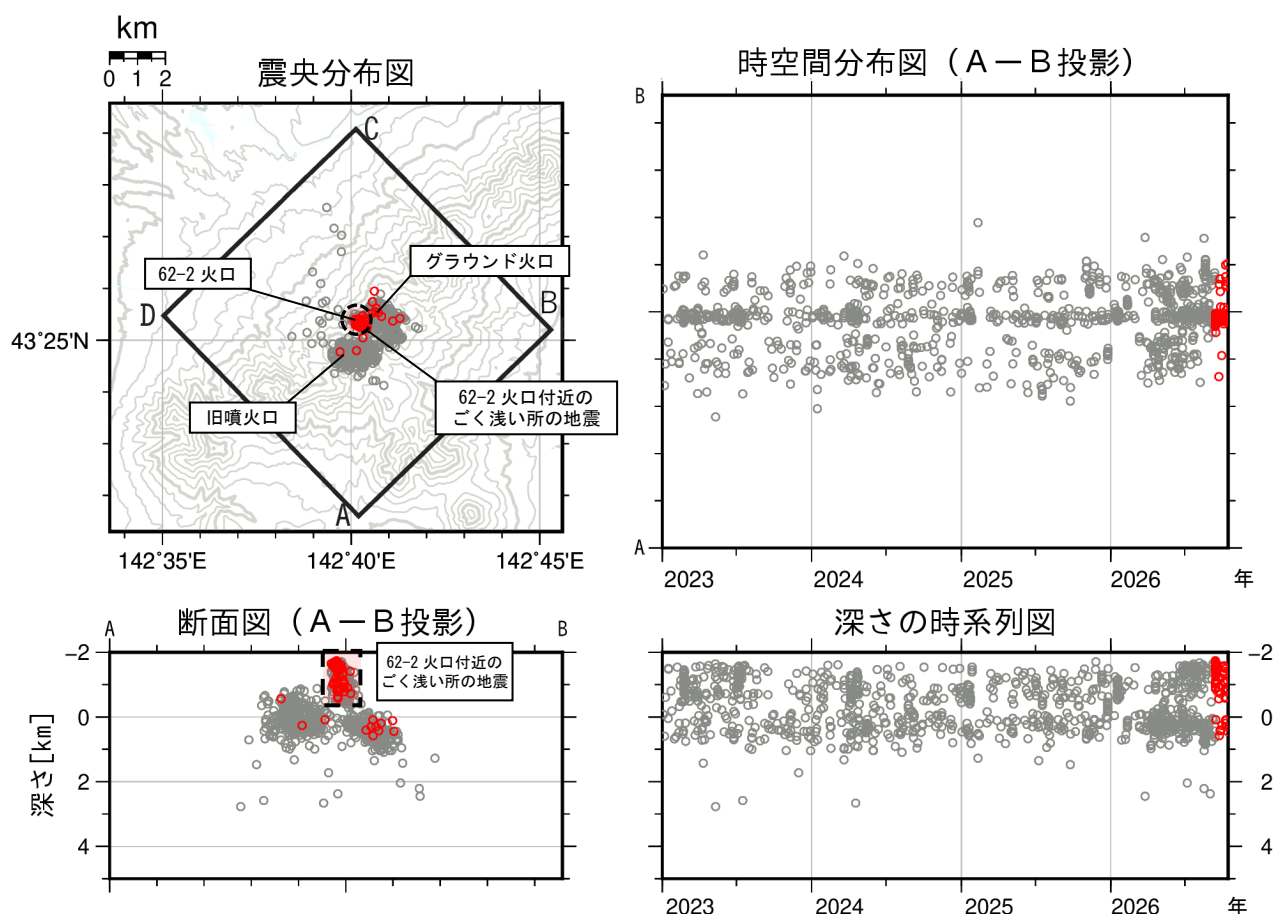


図5 十勝岳 火山性地震の震源分布 (2023年1月～2026年10月14日)

○ : 2018年1月～2026年9月12日の震源

○ : 2026年9月13日～10月14日の震源

- ・ 火山性地震の震源の分布に特段の変化は認められません。62-2火口の周辺では、規模の小さなものも含めて地震は少なく経過しています。



図6 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況 (白金模範牧場監視カメラによる) 及び火口周辺図

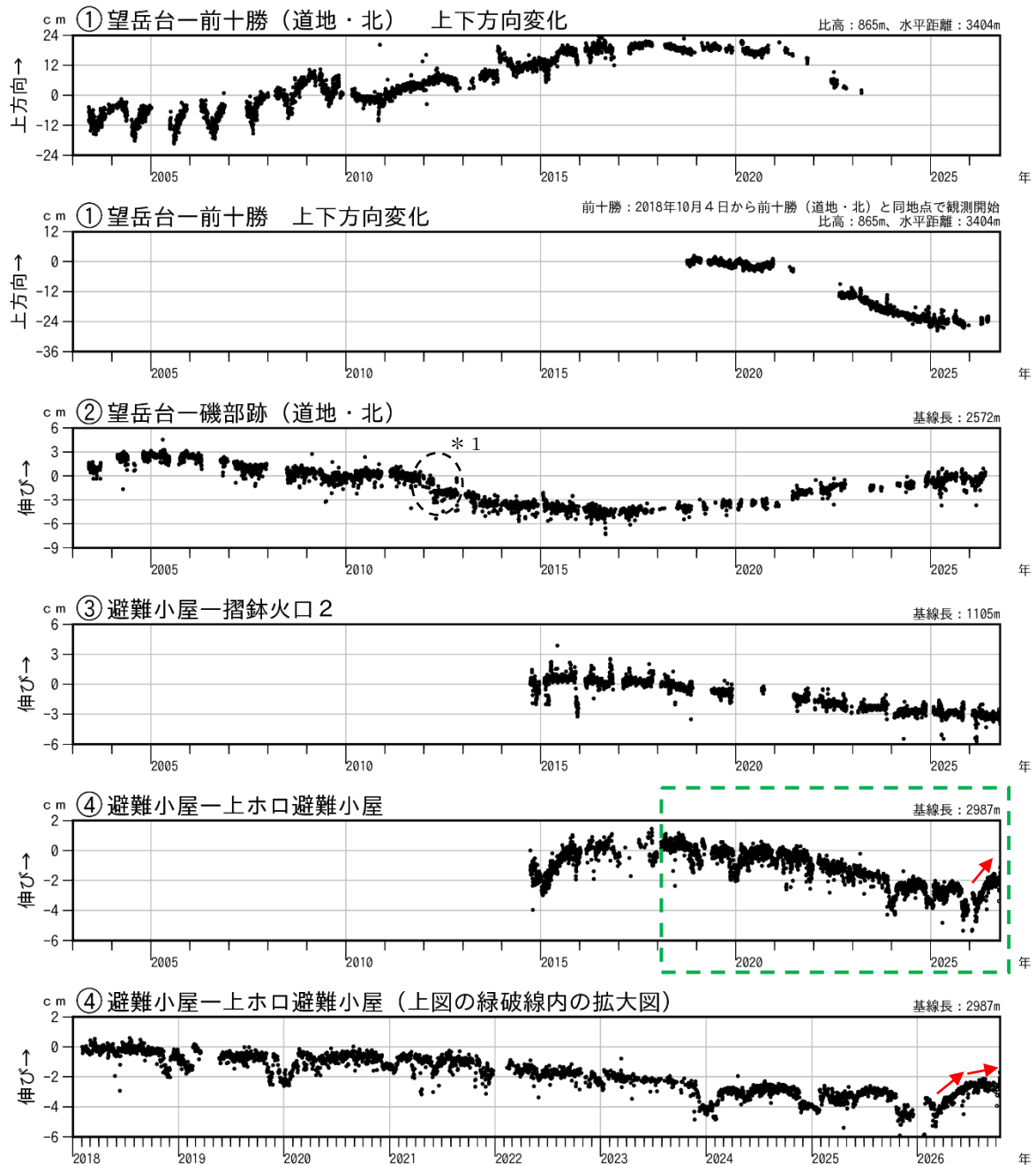


図7-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年10月14日）

グラフ①～④は観測点配置図（図8）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化が認められており、6月頃から鈍化しつつも継続しています（赤矢印）。

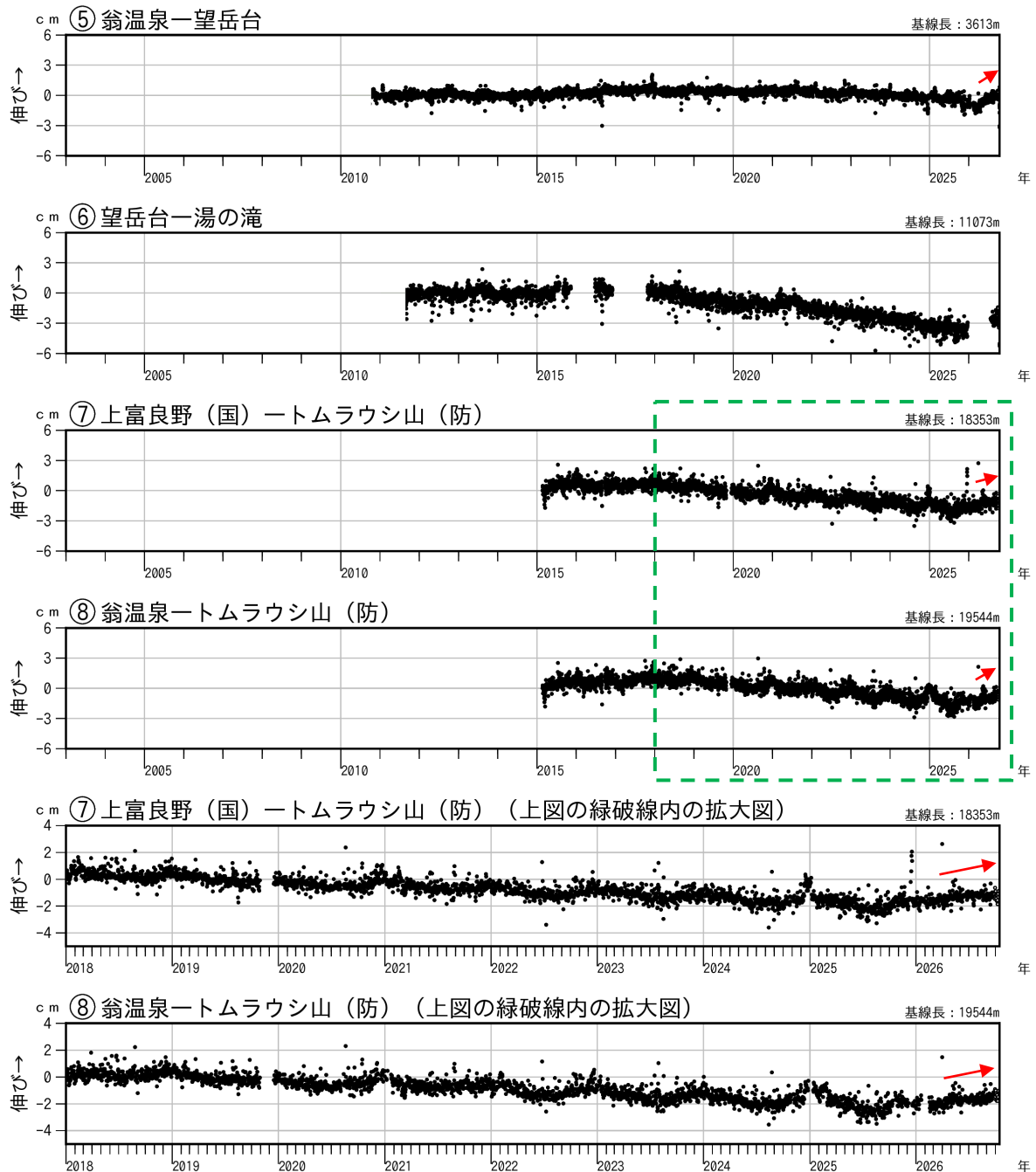


図7-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化(2003年5月~2026年10月14日)

グラフ⑤~⑧は観測点配置図(図8)の基線⑤~⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸び※の変化が認められており、6月頃から鈍化しつつも継続しています(赤矢印)。

※例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

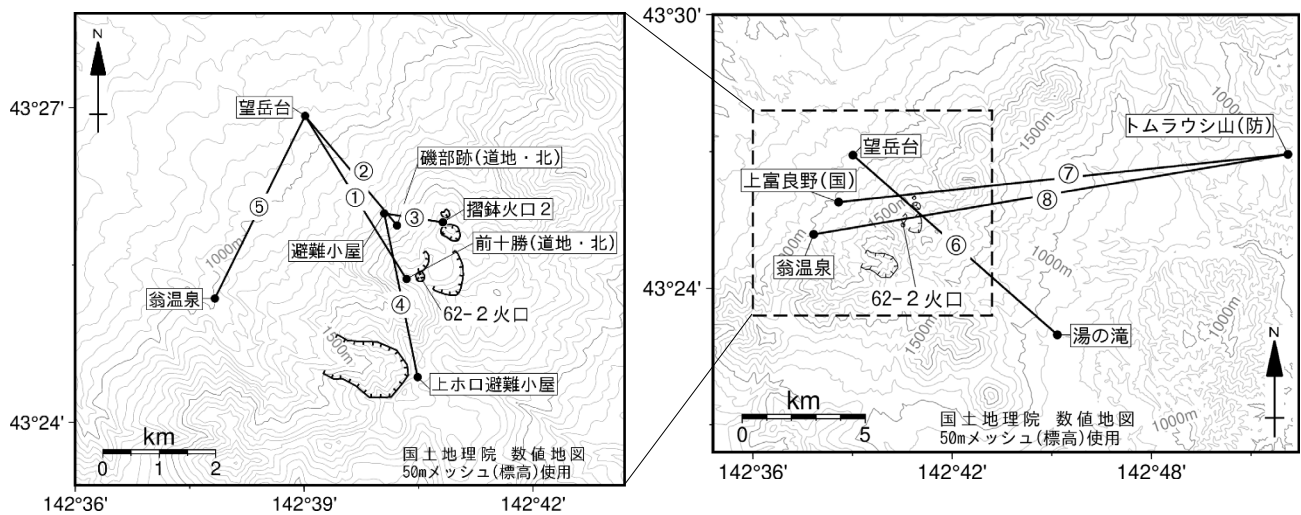
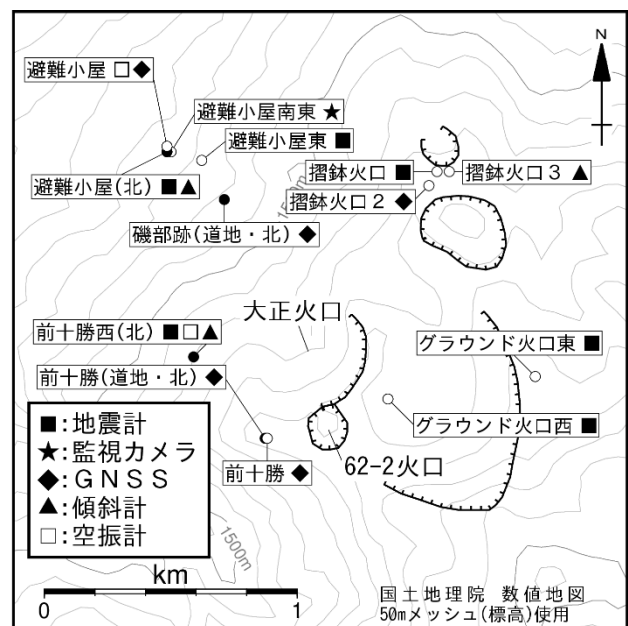
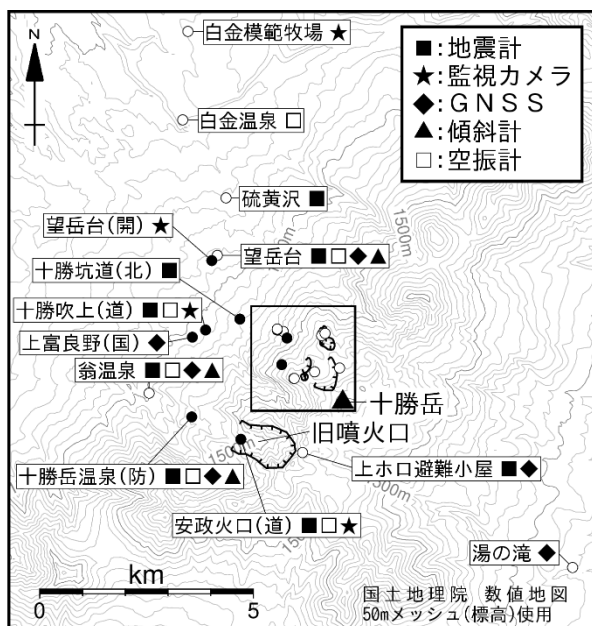


図8 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線④は図3のグラフ⑧に対応しています。

図中の基線①～⑧は図7のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
(開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図9 十勝岳 観測点配置図